学校法人 -ism

泉

若葉学習会専修学校報　No.645
2021 MARCH

一年中マスクの中はわからない かってに美化する私もあなたも

米子校舎　高校一年　中原　遥子

君たち　僕たち

米子校舎　中学1年
氏原　斉さん

「勉強は楽あれば苦もある」福米中学校の氏原くん。学校の成績も優秀で安定していると聞きます。一方、勉強は修行僧のような試練でもあると彼は言います。「将来は、薬剤師になれたらいいなと思っています」まだ、はっきりとは決めてはいないのですが、今の彼が目指すものです。

「好きな教科は美術ですね」ペーパーナイフ（手紙の封を開けるために使う道具）製作が非常に楽しかったと話してくれました。一心不乱に作業に没頭することの充実感があったそうです。「デザインはバナナにしました」バナナが好物だからです。高栄養・低カロリーのバナナは彼自身のキャラクターを表しているようにも思えました。

薬剤師という仕事は精密さや根気が必要とされます。彼の特性に合った仕事だと思います。加えて、礼儀正しく、受け応えがしっかりしているという良い点も、様々な人とふれあう場面で活かされるでしょう。様々なものに触れながらも、自分を崩すことはないそのスタイルで、今後もがんばってほしいと思います。

（担当　乗本）

米子校舎　高校1年
四本　慶治朗さん

「すごく背が高い生徒がいるな。」彼を初めて見たときの印象です。四本くんは、身長が186センチもあります。おそらく若葉で一番背が高い生徒なのではないでしょうか。彼はその身長から、中学校でバスケットボール部に勧誘され、現在、米子西高でも続けています。中学3年生のときには、小学校のときから全国で活躍していたチームメイトと共に中国大会で3位という素晴らしい結果を残しました。西高では、センターのポジションについており、3年生が引退してからは、1年生で唯一のスタメンというのですから、凄いですよね。好きなバスケット選手は、一昔前にNBAで大活躍した「コービーブライアント」と「シャキールオニール」です。現役選手ではなくてもゲーム等で知る機会があるようですね。

四本くんの将来の夢は、学校の先生です。中学校のときに、若葉の先生が楽しそうに授業をしているのを見て、自分もそうなりたいなと思ったそうです。部活だけでなく勉強も非常に努力しているのできっとその夢はかなうはず！

（担当　板見）

卒業生はいま！

カローラ島根
松江店　勤務
近藤　美紀 さん

office&campus

書店で「鳥取・島根のリーディング企業。業種を問わず山陰から世の中を元気にしたい！」という雑誌を見かけました。パラパラとめくっていると、見覚えのある顔が。今月はそこに掲載されていた、カローラ島根松江店で営業を担当している近藤美紀さんにお話を伺いました。

米子東高から島根大学へ進学し、大学時代は軽音楽部でバンドを組んでベースを演奏したり、ボランティアサークルで地域貢献をしたりしていたという近藤さん。住み慣れた地元山陰での就職を希望していました。他業種もいろいろ検討する中で、男性がほとんどで、女性の営業職は珍しいという今の仕事を選択しました。「だからこそ逆にやってみたいと思ったんです。」慣れないことばかりで大変だったそうですが、「飛び込みで訪問して車を見て頂いたお客様から、わざわざお礼のお葉書をいただきました。それからも事あるごとにいただいています。私の宝物です。」と目を細めます。

「車は数年から十数年に一度の大きな買い物。売るスタッフの資質が問われていると感じます。移動手段としてだけでなく、ファッションやプライベートルームにもなる車。お客様に豊かな提案をしたいです。」普段は車両だけではなく、自動車保険やスマートフォンなども販売しています。そして、毎週会社のスタッフブログを書いたり、店頭イベントを企画したりしているのも彼女です。確かに彼女は若葉でも中学校時代から元気いっぱいでした。これからも山陰から世の中を元気にしてくれることでしょう。

（担当　新庄）

私立高では時事問題がよく出ます。昨年官房長官、今年は・・・

松江市の開星高校や松徳学院高校の一般入試が二月二日（火）に実施されました。

昨年と同様に、天候にも恵まれ若葉の生徒は遅刻や欠席をすることなく、無事試験を受けることができました。

開星の入試問題は、公立と比較すると、毎年難易度が高く作られています。特に社会では時事問題が出される傾向があり、昨年は元号（令和）を発表するときの菅さんの写真を見て、この人物の役職名を答えさせるという斬新なものでした。当時の答えは「官房長官」ですが、現在では「総理大臣」になっていますね。

今年の時事問題は「消費税の増税」に関する内容でした。県立入試ではどのような問題が出るのか楽しみですね。

（担当　古徳）

学園NEWS
松江校舎

職員随想
Kさんとのこと

鈴木　眞也

昨年の七月、お世話になった詩人のKさんが亡くなった。コロナ・ウィルスが原因ではなかったのだが、コロナ禍の中で初期治療が遅れ、入院が許可された時にはすでに容態がかなり悪くなっていたらしい。

Kさんは、以前勤めていた福島県いわき市の学習塾に通う生徒の保護者だった。中一のシホちゃん（娘さんの名前）を夜迎えに来ていらっしゃるのをお見かけしたことはあったのだが、そのKさんが自分のよく行く書店の店長をされているということを知ったのは、シホちゃんが塾に通い出して半年近く経ってからだったと思う。

その後、書店で本を購入する際にぎこちない挨拶を交わすようになり、シホちゃん経由で、当時新潮社がキャンペーンで使っていたパンダのキャラクターのグッズなどをいただいたりしていた。塾で教えていたのは「数学」だったのだが、やたら書店に来る読書家（？）として見込まれたのかどうか、ある時ご自身の詩集を、これもシホちゃん経由でいただいた。

その時は、生意気にも詩の感想を書いたお礼の手紙を書いたような気がするが、何を書いたかまでは覚えていない。それから特にお付き合いが深まったというわけでもなかった気がする。Kさんのご自宅にお邪魔して、夕飯をごちそうになったりし始めたのは、その二年後、シホちゃんが中三になってからだ。

当時はもう塾を辞めており、東京での再就職を目指しながらアルバイトをするか職業訓練校に通うか何かしていた。そんな時、どういうきっかけだったか忘れてしまったが、シホちゃんの家庭教師をしてほしいという依頼をKさんから受けた。

ただ、自分は就職活動のこともあって年内での東京への引っ越しを決めており、受験の直前までは面倒を見ることができないが、それでもいいか、というような話だったと思う。英語が苦手なので英語を見てほしいと言われ、それから毎週曜日を決めてご自宅にお邪魔した。

授業のあとは、必ずご家族と一緒に夕食をいただいた。今思い出しても厚かましい限りで赤面ものだが、自分の家族以外のご家族に受け入れられているという感覚がとてもうれしかった。父娘ゲンカのあとで、涙が止まらないシホちゃんにいつも通り英語の授業をしたこともある。今彼女にその話をしたら嫌がられるかな？

家庭教師の力がどこまで役に立ったかは定かでないが、シホちゃんは無事志望校に合格。東京でその知らせを聞いたが、合格を伝えるお母さんの声が涙声だったのをよく覚えている。時々生徒から、「何でセンセイやってるんですか？」という趣旨のことを聞かれるが、それは多分この時のような経験が忘れられないからだと思う。本人は決して先生をやっているつもりはなく、一介の塾講師として会社勤めをしている意識しかないのだが、それはまた別の話。

米子に戻ってからは、九月に二十世紀梨を送り、いわきからはサンマが届いた。サンマが届かなくなって、年末に又兵衛といういわきの地酒が届くようになったのは、震災で原発が壊れてからのことだ。

正直、半年経ってもKさんがこの世にいないという実感がない。ご冥福をお祈りする、という気分にもならない。以前のようにご自宅で待ってくれている気がする。Kさん、もうちょっとかかると思いますが、気長に待っていてください。必ず行きますから、まずはビールでも……。